2026年11月13日

各　位

会　社　名　株式会社オークファン
代表者名　代 表 取 締 役 社 長　武永　修一
（コ ー ド 番 号　3674 東証グロース ）
問合せ先　執行役員 経営管理部長　市橋　哲
（TEL 03-6809-0951）

# 通期連結業績予想と実績値の差異に関するお知らせ

2025年11月14日に公表いたしました2026年９月期（2025年10月１日～2026年９月30日）の連結業績予想と本日公表の実績値に差異が生じましたので、下記の通りお知らせいたします。

記

１．2026年９月期通期業績予想と実績値の差異

2026年９月期通期連結業績予想値と実績値との差異（2025年10月１日～2026年９月30日）

| | 売上高 | 営業利益 | 経常利益 | 親会社株主に帰属する当期純利益 | １株あたり当期純利益 |
|---|---|---|---|---|---|
| 前回発表予想(A) | 百万円<br>5,600 | 百万円<br>50 | 百万円<br>40 | 百万円<br>20 | 円 銭<br>1.90 |
| 今回実績(B) | 5,864 | 95 | 132 | 44 | 4.23 |
| 増減額(B-A) | 264 | 45 | 92 | 24 | ― |
| 増減率(%) | 4.7 | 90.0 | 230.0 | 120.0 | ― |
| (ご参考)前期実績<br>2025年９月期 | 4,657 | △201 | △168 | △329 | △31.51 |

２．差異の理由

当連結会計年度におきましては、既存事業が堅調に推移したことに加え、2025年に立ち上げたAIプロダクツ及びライブコマースの新規事業が本格的な成長段階に入り、順調に売上を伸ばしました。

新規事業のうちAIプロダクツでは、AI・データを活用した商品開発により「AP LAB」「KACHIKA」の販売が大きく拡大し、年間売上高は約15億円、第４四半期の売上高は前年同期比約４倍となりました。「AP LAB」のハンガーシリーズは累計販売数100万本、水切りラックは累計販売数25,000台を突破し、「KACHIKA」

においてもブランド立ち上げ初年度から複数カテゴリーでAmazonベストセラーを獲得するなど、ヒット商品を継続的に創出しております。また、150社超の提携工場ネットワークを活用したOEM支援においても、大手ブランド・全国展開企業からの受注を獲得し、当社が商品企画・支援を手掛けたスーツケースシリーズの累計出荷台数は143,000台を突破いたしました。

ライブコマースでは、2025年６月に日本で提供が開始されたTikTok Shopにおいて、商材特性に応じた複数アカウントの運営と販売ノウハウの蓄積が奏功し、第４四半期の販売額は前年同期比約10倍に拡大、月次販売額は４ヶ月連続で過去最高を更新いたしました。

これら新規事業の成長により、プラットフォーム事業の売上高は前期比76%増の2,894百万円となりました。既存事業においても、ソリューション事業がaucfan marketingの広告運用サービスの顧客拡大等により増収増益となったほか、NETSEAではAIを活用した集客・オペレーションの自動化等により収益性が大きく改善し、OSRもシール商材等の需要増加を背景に売上が伸長するなど、堅調に推移いたしました。

これらの結果、連結売上高は前期比約26%増の5,864百万円となり、４期連続の減収から増収に転じるとともに、前回発表予想を264百万円上回りました。四半期ベースでは、当期を通じて売上高が拡大を続け、第４四半期の売上高は1,717百万円（前年同期比54%増）に達しております。

利益面につきましては、新規事業の売上拡大に伴い、プラットフォーム事業の売上総利益が前期比約75%増の1,946百万円と大きく伸長し、極めて厳しい円安環境下においても先行投資負担の吸収が大きく進展いたしました。これにより、プラットフォーム事業の営業損失は前期の229百万円から135百万円へと大幅に縮小しております。加えて、ソリューション事業が営業利益644百万円（前期比４%増）と安定的に利益を創出したほか、AI活用を含む業務効率化・コスト最適化等が寄与し、連結売上総利益は前期比36%増の2,950百万円となりました。

この結果、営業利益は前回発表予想を90%上回る95百万円となり、前期（2025年９月期）の営業損失201百万円から黒字転換を達成いたしました。四半期ベースでは、第２四半期以降３四半期連続で営業黒字を計上しており、黒字体質への転換が着実に進んでおります。

さらに、余剰資金の運用益や為替差益等を営業外収益に計上したことにより、経常利益は132百万円（前期は経常損失168百万円）、親会社株主に帰属する当期純利益は44百万円（前期は親会社株主に帰属する当期純損失329百万円）となり、各段階利益において黒字転換を果たすとともに、いずれも前回発表予想を大きく上回る結果となりました。

このように、当連結会計年度においては前期の赤字から脱却するとともに、既存事業の安定した収益基盤に加え、AIプロダクツ及びライブコマースを中心とする新規事業が利益に貢献する事業構造への転換が進展いたしました。当社グループは引き続き、これらの事業の拡大と収益性の向上を推進し、安定的かつ継続的な利益の創出と持続的な企業価値の向上を目指してまいります。

以　上